クラーク会館のオルガンについて

1999.6.25 北海道大学オルガン研究会

北海道大学クラーク会館講堂のオルガンは、道内では北星学園のチャペルに続いて道内 2 番目に設置されたパイプオルガンで、現在も道内で有数の規模を誇るものです。また、国立総合大学のパイプオルガンは、他に東大駒場に小規模なものをみるのみです。それゆえ、クラーク会館のオルガンは北大を特色づける存在となっています。

北大の創基 80 年を記念して学生会館が作られることになったときに、当時学長としてこの事業を推進された杉野目晴貞先生は、「これからの総合大学は学問の場であると同時に教養文化人として芸術を愛する者を育てる場所である」、という理念を持たれ、卒業生などに募金を呼びかけられました。その結果、クラーク会館の新営にあたり、北大創基 80 周年記念会館建設期成会からの寄贈という形で、オルガンの設置が実現しました。

現在、岐阜白川にオルガン工房を構えられている辻宏氏に楽器の規模について考えていただいた上で、1962 年 11 月にドイツ・ボンのヨハネス・クライス社におよそ 1080 万円でオルガンが発注されました。3 年余の後に製造が完了となったたこのオルガンは、ハンブルク港から小樽港への船旅を経て、北大に到着しました。その後、日独の技師により 1 ヶ月弱の期間をかけて組み上げられ 1966 年 5 月末に組立と整音が完了しました。その後、6 月 6 日に当時東京芸大助教授の秋元道雄氏による第一回の演奏会が聴衆 750 人という盛況の下に行われました。

その後も創基 90 周年記念、法学部設立 30 周年式典をはじめ、内外の著名なオルガニストを招いての演奏会が行われ、また哲学者の森有正氏が避暑を兼ねた著作のために札幌を訪れられた折りにもオルガンを演奏されていました。この時のクラーク会館での演奏は CD 化されています。(森 有正 ~ 思索の源泉としての音楽・新しく生きること講演とパイプオルガン演奏/ PHILIPS PHCP-3314-5)。ところが 1985 年 11 月の第 30 回の演奏会をもって公開演奏会は中止されてしまいました。維持費がかかるわりに聴衆の少なかったことが原因のようです。

1991 年になって当時の丹保学生部長がオルガンの活用を決められ、交響楽団による室内楽演奏会でオルガンが使用されました。大学主催の演奏会もこの頃に再開されました。さらに 1993 年の演奏会では当時の深澤学生部長が、オルガンを職員学生にも積極的に開放するし、オルガン同好会といったクラブの誕生を期待すると話されました。これを受けて、オルガン音楽の演奏と研究を目的とした北大オルガン研究会が 1994 年に設立されました。現在、公認学生団体としてクラーク会館のオルガンを用いた活動を土曜の夜を中心に行っており、コンサートも年に数回、開催しております。学外から演奏者を招いての大学主催のオルガン演奏会も毎年 1 ~ 2 回実現しています。

オルガンは色々な音色を出すことが出来、ストップ (音栓) と呼ばれる機構によりこれらの音色を組み合わせることが出来ます。別表にその一覧を示します。このうち 1 から 6 までのストップはペダル、7 から 15 までのストップは主鍵盤、19 から 28 までの鍵盤は副鍵盤に対応しています。それぞれのパイプは正面左、右下、右上に置かれています。副鍵盤のパイプの収まっている部分にはスウェルと呼ばれる鎧戸がついていますが、これを足元のペダルを用いて開閉することで、一部のパイプに関しては音量調整可能となっています。 また、16 から 18 までのストップはカプラー (連結器) であり、本来、主鍵盤 (I)・副鍵盤 (II)・ペダル (P) で弾かれる音を他の鍵盤でも鳴らすことが出来るようにするための役割を担っています。28 番のストップは特殊なストップで、これを用いると副鍵盤から鳴らされるパイプの音にビブラートが加わるようになっています。ストップの番号とともに書かれている数字はパイプの長さをフィートで示したものです。同じ鍵盤に対応するパイプをみた場合、8' を基準として数字が 2 倍になればパイプの長さが 2 倍 (音が 1 オクターブ低い)、数字が半分になればパイプの長さが半分 (音が 1 オクターブ高い) となります。

今後、このオルガンがますます充実した維持のもとに置かれ、学内外のみなさんをより一層楽しませるものとして活躍してくれることを希望しています。なお、この解説の作成に際し、えるむ 6 6 号 (1993 年) 巻頭の小林三樹先生の記事、ならびに北大時報 356 号 (1983 年) の表紙写真解説記事を参考にさせていただきました。

北海道大学クラーク会館大講堂オルガン　ストップリスト

製作　　:ヨハネス　クライス　オルガン工房 (Johannes Klais Orgelbau　ドイツ ・ボン)
設計　　:1963 年　　竣工 :1966 年　　ストップ数 24
パイプ数 :1556 本 (木管 147 本、銅管 50 本、錫鉛合金管 1359 本)

Pedalwerk

1.	Subbass	16’
2.	Principal bass	8’
3.	Pommer	8’
4.	Spitzflöte	4’
5.	Octav	2’
6.	Fagott	16’

Hauptwerk

7.	Principal	8’
8.	Holz gedackt	8’
9.	Octav	4’
10.	Rohrflöte	4’
11.	Nasard	$2\frac{2}{3}$
12.	Waldflöte	2’
13.	Mixtur	4f
14.	Dulcian	16’
15.	Trompete	8’

Koppel

16.	I-P	
17.	II-P	
18.	II-I	

Schwellwerk

19.	Weiden pfeife	8’
20.	Koppelflöte	8’
21.	Principal	4’
22.	Quintade	4’
23.	Octav	2’
24.	Larigot	$1\frac{1}{3}'$
25.	Sesquialter	1-3f’
26.	Scharff	3-4f’
27.	Rohr schalmey	8’
28.	Tremulant	SW